

杉浦明平著

ルネッサンス文学の研究

この書物は、いわゆる教科書風の文学史概説ではなく、またむやみに多い註ともつてまわつたありがたい論理で「文学を志す人」のあわれむべき向上心を萎縮させてしまふような論文集でもない。著者はただこの題名をとおして、ルネサンス市民社会のきびしい奮闘の歴史を、またその上にはなやかに咲きそろい、あるいははかなくしおれてゆくかざかすの文学の姿を、きわめて率直な態度で直接読者にはなしかけるのである。だからこの中で、われわれは荒々しく力強い歴史の息吹を身近に感じとるだろう。このように単なる文学史としてではなく、むしろ幅の広い歴史書としての印象をあたえるのは、著書のことばをかりるなら、「今日のようにロマンというジャンルがまだ文学の主流に現れず、むしろ歴史哲学経済の類までが文学の内に包括される未分化状態にあつた以上、私の言説も各方面にわたらざるをえなかつた」からであり、

さらにそれと重り合つて《反封建闘争をふくむ今日の私たちの課題に当面するとき、追求をノヴェルあるいはポエジエだけに限つて純文学の問題として提出することは誤りでもあれば危険でもある》という自覚にもとづくからであろう。

杉浦氏はルネサンス運動の本質的な意義としての「人間性への復帰」の胎動を、古譚百種 *Cento novelle* のなかに見出す。——十年間洞窟の中で育てられた王子は、「王様によつて外にひきだされ、その前にかざかすの美しい宝石や数多の美しい乙女たちをならべられ、それぞれのものを教えられて、さらに乙女のことを悪魔だとおしえられた。そのあとで一同はどれが一番気に入つたか、とたずねた。王子はこたえた。悪魔です。」——著者はいう。《つまりこれには何世紀にわたる中世紀の洞窟から、日の光の下に出た人民たちが人間の美しさを発見した讃嘆の叫びがこもつているのだ》(P. 118)。このように古譚百種の中に、著者は中世的なはずかすの愚劣な奇蹟への盲従をおしのけてあかるみかけたルネサンスの夜明けを見出そうとするのである。周知のように、ルネサンスの夜明けは

十二世紀以来の東方遠距離通商の独占によるイタリヤ商業資本の異常なまでの發達をうらづけとした自治都市の勃興を中心として考えられなければならないのであるが、著者はさらに、海外から輸入された原料を加工する家内工業が貿易の發達に刺戟されて急速におこつたとし、この商工業者の経済的な躍進は各都市に君臨した旧封建的土地所有者、領主貴族との政治闘争をひきおこすことをとく。さらに豊奴解放が最も徹底して独立自営農民をつくりだしたトスカナ周辺では、手工業生産品の消化地としての農村の存在と、他方土地から解放された農民の都市への集中が都市内労働人口の供給源として役立つたという事実から、トスカナ諸都市の市民層の一層の繁栄とそれによる旧封建勢力への圧勝をもたらしす。その焦点をフィレンツェ共和国にむけた著者は、反封建闘争のなまなましい勝利の記録を、フィレンツェの大商人であつた、ディーノ・コンパニーニの熱情にあふれた「白黒年代記」にゆだねるのである。(第一部第三章、ディーノ・コンパニーニとその時代)、また「白黒年代記」については岡氏のすぐれた訳がある。——世界古典文庫)

政治的經濟的覇權を把握した階級に、その階級闘争の一環として新しい文化をも創り出さねばならなかつた。中世的文化遺産の上になげられたとしても中世とははつきり區別されるべき多くの新しい文学——市民にとつて

は最も大きなたたかひの場としての俗語の使用——が、ダンテの中に見出されたのも当然であろう。イタリア半島の他の町々が十字軍運動の衰退により、また郡部農民の解放の不徹底によつて産業をおこすことが出来ず、単なる半中世的都市として低迷しはじめたとき、フィレンツェはその毛織物産業と、ヨーロッパ各地を制覇する金融業によつて、その最大の經濟的繁榮期(十四世紀前半)にはいつていたのである。ジョヴァンニ・ヴィルラーニがその年代記のなかで、市民的誇りをもつてフィレンツェの繁榮をたからかになえ、チエッコ・アンジョリエリが「おれの好きなものはただ三つ、女と居酒屋とサイコロだ」と大胆にうたう。このような勝利によつて市民層の頂点に、著者は二人の天才、ペトルカとポッカチオをおくのである。《ペトルカこそあらゆる点において近代インテリゲンチヤの模倣といつてよい。落着かない人

間、感じやすくふらつく精神、古典への傾倒、恋と優雅な詩、そ、ういうものをもつて彼フランチエスコ・ペトルカは、ダンテの憤怒と法

悦のうちの中世の夕日が沈んだとき、新しい歴史の水平線に最初の近代人としてあらわれたのである。》(P. 113) ペトルカの孤独的な弱さ、動揺という特性と反対に、發展の進歩的新興ブルジョアジーの魂がふきこまれたものとしてポッカチオを把握している。《つまりポッカチオはトスカナはアペニンニの山脈による封建領主の最後の城砦をおとしたフィレンツェ市民の文学的選手だつた》(P. 113) のである。そして著者は、デカメロンの成功の大半は封建社会(特權階級としての聖職者をふくめて)のなまなましい暴露によると考へる。またノヴェルラ(短篇小説)によつて上昇する市民層と封建制度および封建的イデオロギーとの闘争の表現であるとする著者は、このデカメロンにおいて《古いノヴェルラに萌芽していたものろもろの図式的な人物を「深く繊細な加工によつて」一個の芸術的人間典型にまで高めえた》(P. 118)と評價し、さらにこの後継者としてデカメロンのもつ市民性を一層發展させたものにフランコ・

サクケッティをあげるのである。(第二部、第一章)

しかし杉浦氏は、以上のべてきた一連の市民層の明るい勝利のみを強調するのではない。神と教会を愚弄したポッカチオの晩年におそつた神へのおそれ、彼をして中世的な暗い死の観念につかれつつ晩年を神祕の扉の彼方ですごさせることになつた。《市民の最もかがやかしい上昇時代でダンテの威嚇的なきびしい叱咤の声も忘れ、いわゆる英雄時代がおわり、陽気でさわがしい小市民の世界がひらかれようという刹那、その最も大胆で力強い哄笑をすべき男が不意に黙つて涙の生活にふけるとは、表面の明るさにもかかわらず中世の呪がいかに深かつたかを見よ。》と考へるとともに、フィレンツェに發展した高利資本と商人資本の性格を規定することもおこたらない。「商業資本の發展は、商業をして、当面の諸生産組織にたいし、いたるところで多かれ少かれ分解的な影響を及ぼすが、どの程度まで商業が旧生産様式の分解を生ぜしめるかは、まず第一に旧生産様式の堅固さと内部的編制とに依存する。またこの分解過程がどんな結果を生ずるか、すなわち、どん

な生産様式が旧生産様式の代りに現われるかは、商業にはなく、旧生産様式そのものの性格に依存する。時には旧生産様式を保存することさえある。その上高利は、これをたえずくりかえして利用しうるためには、旧生産様式を直接に維持しようとするのであり、保守的であり、これを一そう悲惨たらしめるにすぎない」のである。ここにルネサンス経済の限界があきらかに横わつてゐる。中小商人、手工業者の反抗にもかかわらず、貨幣の安全な逃避場としての不動産への投資は、農村にたいする大土地所有者の地代強化をまねくとともに、この封建的土地所有者による工業の停滞をまねき、中小市民の没落とともに上層市民層の貴族化、孤立化をもたらすのである。中産的市民層がかつて代表した十四世紀の新興市民文化は、十五世紀より十六世紀はじめにかけて、貴族階級の裝飾品に墮していく。時を同じうする動乱は、ルネサンス文化の消滅という歴史的瞬間をまねくのであるが、なおすぐれた文化のかがやきを十六世紀の前半に放ちつづけずにはおかない。この場合において、民衆生活からの乖離において芸術創作を失つたレオナルドが自然科学に全

力をふりそそいだものと理解し、このような社会的現実からの孤高的逃避とは逆に、「人たるものは世界が悉く泣いているときに笑うべきでない」というミケンジェロの苦悩が社会的現実に対する抵抗に基礎をおくと考へる著者は、さらに崩壊期のきわめて現実的な、個人主義的な、病みのたうちまはるルネサンス文化の象徴としてのチェルリーニをえがき出すのである。

大略以上のような杉浦氏によるルネサンス社会と文学に関する理解の中で、われわれがうるける強烈な刺戟と印象を以下のようにいふであらう。

杉浦氏はあくまでもルネサンスを単なる古代文芸の復興ではなしに、古代とも中世とも異質の新しい社会が芽生えた時代と考へ、この時代は中世的なものへの新興市民文化の挑戦の系譜によつてあつてつづけるという立場にたつ。この線にそつて本書は全ルネサンス文学の潮流を整然と區別し統一してゐるのであるから、読者は今までのこみいつたルネサンス概念論争にわずらわされることなく、爽に明確なかたちで、ルネサンスの社会と文学の流れを理解することが出来るのである。杉浦

氏の立場は明確に中世打破によるルネサンスの誕生という立場によるために、ブルードッハなどの、ルネサンス的要素がすでに中世にあつたとしてことさらにルネサンスの新しい意義を没し去らうとするいわゆるメディアエヴァリストにたいし滴身の敵意をもつてたたく。《フランスの馬鹿学者ジルソン先生をまたずとも古典の研究が中世を通じて行われたことは分つてゐる。しかしジルソン先生のごとき紙魚としてでなく血液の循環せる人間として古典を眺め、それによつて生きる路を学ぶに至つたのは正しく千二百、三百年のこと》(P. 186)と主張するとともに、《ルネサンスのもつ多様性と多面性——そんなことに誰でも知つてゐる——とを強調することによつて、即ち樹を指して森の姿を見失はしめることによつてルネサンスの近代の意義を抹殺しようとする》(P. 187)たくらみに本心から立腹するのである。

われわれは、ルネサンス精神の中に合理性、近代性を見出そうとする以上の立場はあくまでも正しいものとおもふ。このような立場は著者もいうように羽仁五郎氏の影響もうけてはいるが、最近のソヴェートの歴史家ラ

ザレフがおこなつた《ルネサンス文化史批判》(V. Izarev, Contro la falsificazione della storia cultura rinascimentale, «Krasnoga sovietica» III, 1952 pp. 8-25) にもこの傾向があらわれている。しかし杉浦氏の作品がわけても重要な位置づけをされねばならない理由には、上述のようなアンティ・メデイエヴァリストという進歩的理念のあとづけをもつ理論の統一性——単純明解な論理性によつて乱脈した知識の重圧からのがれたいひとびとには魅惑的かもしれないが——をうけついでということではなく逆に、ルネサンス文学の実体に具体的に迫りつつ、単なる理論的絶叫に終らない豊かな肉付に成功したばかりでなく、しかも全般を通じて一貫した主張をまもりとおした点にある。

この意味で、われわれがこの国でもちえた最初のルネサンス文学の研究書であり、さらにこれがわれわれのルネサンス研究における不滅の金字塔をうちたてたものと評価するのも決して誇張や儀礼によるものではない。

しかし、その多くを杉浦氏が「あとがき」の中でみとめておられるように若干の問題にのこされよう。アンティ・メデイエヴァリス

トのラザレフも気付きながら力及ばなかつたように、連続説をとつた単純な中世主義から更に理論的に前進したメデイエヴァリストへの攻撃が行われていない点があげられる。すなわち、トッファニンのいうように、ルネサンスとはアラビアの合理的思考様式の侵入にそなえたカトリックの例よりする自己防禦のための文化運動であるという見解には、著者はいかに対応するのであろうか。また、アラビアがもたらしたものはアヴェロイスの唯物思考のみでなく、まず農耕様式が南イタリアにもたらされ、この農耕様式が南イタリアから北イタリアへと伝播したことが、ルネサンス文学がシチリアにはじまつてポロニヤへと移つていく過程の一面の説明となるのではないだろうか。また、フィレンツェの文学活動に主体をおいて、全く社会的経済的地盤を異にするミラノ、ローマ教会領、ナポリ王国の文学を関連的にとらえていない点にも若干の疑問はのこされよう。(しかしこの難事は現在のわれわれにとつては殆んど見込のないものかもしれないが) また著者もいうように一五世紀の社会ならびに文学の把握が欠けている点はなにより惜まれるし、このた

め、一六世紀以降に何故科学的經驗的、現實的傾向が明確になつたのかという素材でしかも重大な疑問への充分な解答が用意されないという結果をもたらすかもしれない。他方、デ・サンクティスやバルトリーの文学史によつた著者も、とくに叙事詩、タッソー、アリオストに関する部分が欠けているのは、文学史家の側からは不満のあるところであらう。

× × ×

杉浦氏のあゆんでこられた途は、まことに困難でけわしいものであつた。多難なファシズムの戦争時代に、また戦後のカオスに、着々と書きためられたすぐれた論稿、わけても原典よりする忠実巧妙な翻訳(この点杉浦氏は多くのルネサンス文学を語る「にせもの」から自己を隔絶する自負をもたれるのは当然である)が、この国の後進のルネサンス研究者に、どれ程深い激励となり炬火となつたことであらうか。多くの人々は、杉浦氏の方法のみならず、着実な業績に敬意を表さねばならない。しかし、われわれは、悲しむべき事実を知っている。というのは多忙な評論家としての杉浦氏の個人的な理由で、そのルネサンス研究が同氏にとつては、充分な時間をさく

ことは出来なくなつた事情である。しかしねがわくは、この研究を事情の許すかぎり「副業」と墮せしめず更に高められることを、ルネサンス研究者の立場より心から説得したい。

杉浦氏のすぐれたこの研究は、ヨーロッパの歴史に関心のあるひとびとはいうまでもなく、むしろその専門以外のひとびとにこそ読んでいただきたいとおもうのである。研究者に裨益するところ多大であるばかりでなく、ルネサンスに全く無知なひとびとをも熱中せしめずにはおかない魅力さえも持つ書物であるから。(本文四一六頁、定価六八〇円、未来社刊) —永井三明—

末松保和著

新羅史の諸問題

本書は末松博士の学位請求論文であり、「新羅史の新研究」と題して東京大学に提出され、昭和二十六年審査を通過して学位を得られた論著で、今回頭書の如き書名に改めて東洋文庫論叢第三十六として公刊されたものである。本研究の内容及び学問的評価は、既

に論文審査要旨として公表されているから、ここに改めて紹介することは蛇足を加えるの愚を敢えてするに過ぎないであろうが、学位論文の審査という公的な立場とはおのずから異なる紹介論評も無意味でなからうし、それにもまして本書のような特殊な研究が公刊されたことは、同好の学徒には、まことに同慶事であり、このよろこびから一言を呈せざるを得ないものがある。

著者の学究歴を簡単に顧ることは、本書の学問的価値を理解する為の基盤となるであろう。あるいは、研究年譜を紹介するほどの年配ではないと、著者から苦情が出るかも知れぬが、本書は著者の研究生活を劃するメモリアルである。著者は東京帝国大学卒業後直ちに京城に赴き、朝鮮史編修会の修史官として、ついで京城帝国大学の教職につき朝鮮史第二講座を担当し、終戦の年に及ぶまで二十一年に近い年数を、朝鮮史研究の最好条件のもとに過ぎたのであつた。その間、「朝鮮史」第一編三巻・第二編一卷、及び第五編などの撰修を担当し、一方個人的な研究として多くの論文を「靑丘学叢」「史学雜誌」「朝鮮」京城帝国大学文学会「史学論叢」などに発表

された。本書の内容をなす九篇の論文はそれから既発表の内に含まれて居り、今それに増訂補正を加えられたものである。著者の研究は広く朝鮮史一般に亘つているが、就中新羅史の研究に力を注がれ、それを一括して単行本とされたことは、自ら許すに会心の作となす所以であろう。同学の学徒から見ても末松博士のすぐれた作品がそこに集められていることに異論はあるまい。

本書は下文に紹介する九篇の論文の外に、「新羅史研究の回顧」と題する序文と、附録とが加えられているが、その序文の研究回顧は、新羅史の研究史的梗概であつて、将来朝鮮古代史の研究に志すものにとつては、研究の契として甚だ便利なものであり、次いで序文後半は本書所収の九篇の論文の自己紹介で、内容の梗概的説明に当てられている。まことに深切な序文である。私も一度こんな深切な本を書いて見たいとさえ痛感した。この序においてのみではなく、考証の複雑難解な本文の論考の随所にも見られるところである。論を好んで自ら快とするのではなく、そこに説得的愛情が盛られているのも、その人